



満票でMVPに選ばれた(10月、46号  
ソロを放ち喜ぶ大谷選手)＝共同

## 大谷選手MVP

# 常識外の二刀流 全うさせた覚悟

大リーグ、エンゼルスの大谷翔平選手(27)が19日、全米の担当記者による投票で満票の支持を得て、最優秀選手(MVP)に選ばれた。日本選手として2001年のイチロー選手以来となる快挙の裏に、投打二刀流という異例の道ゆえの葛藤もあったようだ。(スपोर्ट面参照)

日本のプロ野球のMVPはチームの成績を重視し、優勝球団から選ばれ

るケースがほとんど。メジャーの記者の一部にも、チーム成績重視の考えがある。そうした中、ア・リーグ西地区4位に終わったチームから選ばれたこと自体、圧倒的な支持を得たことを示す。今季の成績について、本人が「健康でシーズンを過ごせたこと」を理由に挙げたように、実力からして、不思議のない数字だった。ただ、投打とも制限無しにやってもらう、というジョー・マドン監督の方針のもと、大谷選手は天真爛漫(らんまん)にプレーするだけでよかったか、ということ

「自分がどれくらいチームに利益をもたらせるか。毎試合毎試合、見せないといけない」。開幕間もないころのコメントだ。チームの中に向けてのメッセージと考えられ、二刀流であることで不当に優遇されている、と見られないようにという覚悟の表れだった。

さすがの大谷選手も、打者として、皆勤(けいじん)しながら、投手として中4日、5日で回るメジャー一般の日程で回るわけにはいかない。登板23試合中、中4日はなく、中5日が6試合。自分の登板間隔次第で、仲間の投手たちの登板間隔が整わず、しわ寄せが行きかねないところに、思いを巡らせていたのではないが、指名打者を解除してマウンドに登ったときに、万が一早い回の降板となれば、打線に穴が開く。

好結果が出ているうちはいいが、ダメなら二刀流のマイナス面が浮き彫りになる。野球チームという組織を成り立たせる公平原理が崩れたとき、それは二刀流への懐疑となる。

15日、日本記者クラブでの「凱旋会見」で、二刀流の困難に挑み続けることについて「こうなりたいたいと思った目標を諦めきれない」と語った。「なりたい自分」になる道を閉ざされないためにも、投げ続け、打ち続けなければならなかった。日本ハムで二刀流を始めたときより、メジャーの方が周囲の抵抗は少なかったという。それでも成績が下がればすぐに、投打、どちらかへの一本化論が、チーム内外から出るだろう。

笑顔の裏で、常識との戦いは続く。その緊張が生む尋常でないエネルギーが、どんなパフォーマンスに結実するか、もう来季が待ち遠しい。

(編集委員 篠山正幸)